
孤湊宮博士の実験室

もっふぃー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤湟宮博士の実験室

【Nコード】

N2140M

【作者名】

もっふいー

【あらすじ】

孤湟宮博士の息子ネロとネル。
こねみや

兄のネロは死んだ父親に生き写しの顔をした弟ネルに違和感を覚え、その秘密を知るために「開かずのボックス」と呼ばれる父親の実験室に一人で忍び込もうとするが……

始点

大きくなったら

1ねん1くみ こねみやねろ

ぼくわおとなになったらパパみたいなかがくしゃになりたいです。パパはいつもじっけんしつといってる所にいます。

ぼくははいったことがないところです。

ままもいったことがないっていつてます。

どなんとこなんだろうっておもいます。

だから大きくなったらパパといっしょにじっけんしつにいきたいです。

パパにじっけんしつにいきたいっていいました。

そしたらパパはねろがかがくしゃになって大きくなったらいいよっていいました。

こんどみんなでいきたいです。

ぼくわがぼくはに直され、ピンクっぱいペンでとても大きい花丸でがつけられている。

全体的にくしゃくしゃになった僕の作文は、ずっと机の間に挟まっていた。

「ねーお兄ちゃん。なんてかいてあるの？」

と、僕の制服の裾を引っ張る、現在小1の弟ネル。せっかく気分転換に部屋の掃除をしていたのに、

邪魔してきた。しかも、めざとく僕の作文を見つけてしまい、しきりに読みたがる。

「・・・・・・・・」

「読ませて」

「だめ」

「いいでしょー」

「だーめ」

「お兄ちゃんのばーか」

最近のガキは小1からませている。純粹な時期はとっくに終わってしまったらしい。

「いてっ」

最近習い始めた空手の技までかけてきた。体制を崩すと僕の手からもぎ取るようにして作文を奪う。

ごん

「いった」

頭を机にぶつけ、ひっくりかえる、そして。

空中で、無言の父さんが僕を見つめる。

ただ、写真だけど。

最後の一枚。

ここにあつてはならないもの。

父さんの写真は、空中で目をそらしはらりと胸の上に落ちた。

「お兄ちゃんって、パパのことしてるの？」

「ううん、知らないんだ」

そう言つて、後ろ手にくしゃりと父さんを握りつぶす。

いぶかしげな顔つきのネルは、また作文を読んだ。

「でもさ、ここにパパって」

「あ、だからね。これは僕の想像だよ。ネルだつてするだろ？こんな父さんがいたらいいなつて」

「ふうん。そっかあ、そうだよね」

無邪気に笑い、おれだつたらねえ、と話しかけてくるネルは大丈夫。いつもの弟。

ネルには父さんのことを知られては困る。

父さんはもうこの世には存在していないし、皮肉なことに僕がこの

作文を書いていたときにはもう死んでいたらしい。

朝、学校に行つて、帰ってきたら母さんが泣いていた。

母さんは泣きながら、かたる、かたると繰り返すだけ。

孤渥宮かたる

それが父さんの名前だつて知つてた。なにがあつたの？ともママ大丈夫？とも言わなかつた。

分かつた。いや分かつてしまったとでもいったほうが良かつたのか。それから、父さんの命とすれ違うようにして生まれたネル。父さんの死から1年後の六月に生まれた。

母さんは喜んでいるようだったけど、本当は喜んではいなかつたと思う。小学2年生になつた僕にそんな姿を見せなくなつただけだ。

「ねえ、お兄ちゃんきいてるの？」

「あ、うん」

「きいてなかつたでしょ」

「ごめん」

「じゃあ、もう一回いうよ」

そついうとネルはすつと深呼吸していった。

「おれはねパパに会つてみるのがゆめ」

「いいんじゃない」

「でしょ」

ピンポン

「「あつ」

「たぶんおれのともだちだから。行つてくる」

「気をつけて」

「じゃあね」

僕の言葉をさえぎつて玄関に向かう弟の背中が、やけに大きく見え

た。

扉が閉まる音を聞いて、そっと尻ポケットに入れた父さんの写真を見る。

口は笑っているが、目が笑っていない。

この写真が無くなっても、僕は容易に父さんを思い出せるだろう。だからこれは処分しなくてはいけない。

ネルに見つかからないように、きづかれないように。

かたるとネルが瓜二つの顔をしていると、きづかれてはいけない。

罪

父さんとネルが似ていると気付き始めたのは、つい最近だ。

母さんはそれより前に気付いていたようで、僕が成長することに父さんの写真は点々と無くなっていった。

いつだっただろうか、ひょっこりとでてきたアルバムに父さんと母さんがいた。

ほとんど写されているのは母さんで、父さんは一枚しか写っていない。

いつものようにお気に入りの白衣のポケットに、だらしなく両手を突っ込んでいる。

物憂げな表情が父さんらしい。

「ネロ。ちよつとそれママにかして」

一緒に部屋にいた母さんは、いつの間にか隣にいる。
顔が真っ青だった。

微笑もうとしているのかもしれないが、ほほがひきつっている。

何も言えないまま手から写真を引き抜かれた。

そしてなにも言わないまま母さんは写真を

ひきちぎった

目の前で

屑と化すまで

「今度からネロもこうするのよ」

原型が無くなったものをゴミ箱に捨て、母さんは笑った。

泣いているような笑いだった。

だからこの最後の一枚も同じ運命をたどらなければならぬはずだ

った。

でもどうしたことだろう、捨てられない。

くしゃくしゃになった父さんのしわをゆっくり伸ばして、かぎ付きの引き出しの中にしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2140m/>

孤渥宮博士の実験室

2010年10月9日21時44分発行